

# 喉頭蓋嚢胞を合併した急性喉頭蓋炎の特徴について

原 浩 貴      菅 原 一 真      橋 本 誠      山 下 裕 司

山口大学大学院医学系研究科 耳鼻咽喉科学分野

## A clinical study of patients with acute epiglottitis associated with an infected epiglottic cyst

Hiroataka HARA, Kazuma SUGAHARA, Makoto HASHIMOTO, Hiroshi YAMASHITA

Department of Otolaryngology, Yamaguchi University Graduate School of Medicine

We report the clinicopathological features of 77 patients with acute epiglottitis including 11 patients with acute epiglottitis associated with an infected epiglottic cyst admitted in Yamaguchi University Hospital for treatment. The period of time for analysis with all cases with acute epiglottitis is 7 years between April 2004 and June 2011.

Flexible laryngoscopic findings of a patient with acute epiglottitis at the time of admission showed that severe swelling of epiglottis or swelling of bilateral arytenoids are more often observed with an infected epiglottic cyst patients.

Six (54.5%) out of 11 patients with an infected epiglottic cyst required airway intervention compared to the twenty (30.3%) out of 66 patients without a cyst.

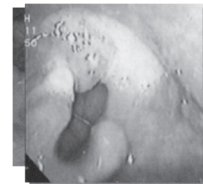
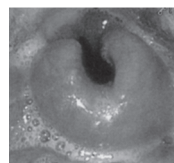
### 1. はじめに

急性喉頭蓋炎は耳鼻咽喉科の日常診療においてしばしば遭遇する疾患であるが、急激な気道狭窄により致命的となりうる緊急性の高い疾患である。この急性喉頭蓋炎の中には、喉頭蓋嚢胞の感染を合併した例 (Fig. 1) も散見される。今回我々は喉頭蓋嚢胞を合併した急性喉頭蓋炎の特徴を明らかにするため、臨床的分析を行なったので報告する。

### 2. 対 象

対象は2004年4月～2011年6月に山口大学医学部附属病院耳鼻咽喉科で入院治療を行った急性喉頭蓋炎77例中、喉頭蓋嚢胞を合併した11例(14.3%)とした。

急性喉頭蓋炎



喉頭蓋は疎性結合組織である喉頭前間隙と傍声門間隙に囲まれていることから、炎症が波及しやすくピンポン球のように高度に腫脹する。喉頭蓋嚢胞の合併例も散見される。

Fig. 1 Findings of flexible laryngoscopy of a patient with acute epiglottitis

### 3. 方 法

急性喉頭蓋炎77例およびその中で喉頭蓋嚢胞を合併した11例につき、後方視的に診療録から臨床的分析を行った。検討項目は、年齢・性別、入院までの日数、入院時の炎症所見、入院時

喉頭ファイバー所見による急性喉頭蓋炎の重症度分類

喉頭蓋のみ軽度の腫脹：Grade I  
 喉頭蓋腫脹+片側の披裂部腫脹：Grade II  
 喉頭蓋の高度腫脹または喉頭蓋腫脹+両側披裂部腫脹：Grade III  
 として判定。

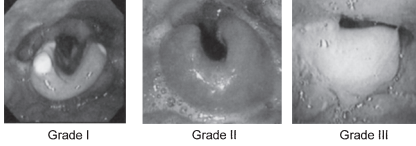


Fig. 2 Classification of acute epiglottitis according to flexible laryngoscopic findings

の喉頭ファイバー所見, 入院時の呼吸困難の有無, 気道確保の有無および入院期間とした。なお喉頭ファイバー所見による急性喉頭蓋炎の重症度分類は, Fig. 2の様に, 喉頭蓋のみ軽度の腫脹: Grade I, 喉頭蓋腫脹+片側の披裂部腫脹: Grade II, 喉頭蓋の高度腫脹または喉頭蓋腫脹+両側披裂部腫脹: Grade IIIとして判定した。

4. 結 果

急性喉頭蓋炎 77 例の性別と年齢分布を見ると, 性差はみられず, 男女とも 30 代および 60 歳代に多い傾向がみられた。喉頭蓋嚢胞を合併した 11 例についてみると, 男性 4 例, 女性が 7 例とやや女性に多い傾向があった。平均年齢は, 喉頭蓋嚢胞を合併した 11 例では  $49 \pm 18.4$  歳, 合併の無い 66 例では  $54 \pm 18.9$  歳であり, 両者間に有意差はみられなかった (Fig. 3)。

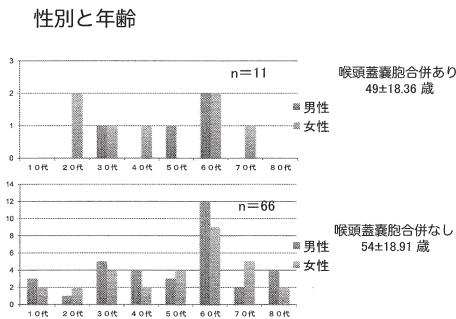


Fig. 3 Patient Characteristics

入院時の炎症反応

	CRP	WBC	体温
■ 喉頭蓋嚢胞合併あり (n=11)	$7.46 \pm 11.1$	$13116 \pm 4815$	$37.3 \pm 0.6$
■ 喉頭蓋嚢胞合併なし (n=66)	$7.41 \pm 7.96$	$11622 \pm 4424$	$37.4 \pm 0.7$

Fig. 4 Inflammation findings at the time of hospitalization

症状出現から入院までの日数については, 喉頭蓋嚢胞を合併した群で  $4.6 \pm 3.1$  日, 合併の無い群で  $2.3 \pm 1.3$  日と, 喉頭蓋嚢胞を合併した群の方が長い傾向にあった。入院時の炎症反応については, CRP, 体温に両群間の差はみられなかったが, 白血球数については, 喉頭蓋嚢胞を合併した群の方がやや高値であった (Fig. 4)。

入院時の喉頭ファイバー所見では, 喉頭蓋高度腫脹または喉頭蓋+両側披裂部腫脹をきたした重症度の高い症例の割合は, 喉頭蓋嚢胞を合併した群で 46%, 嚢胞の合併の無い群では 30%と, 喉頭蓋嚢胞を合併した群の方が高かった (Fig. 5)。

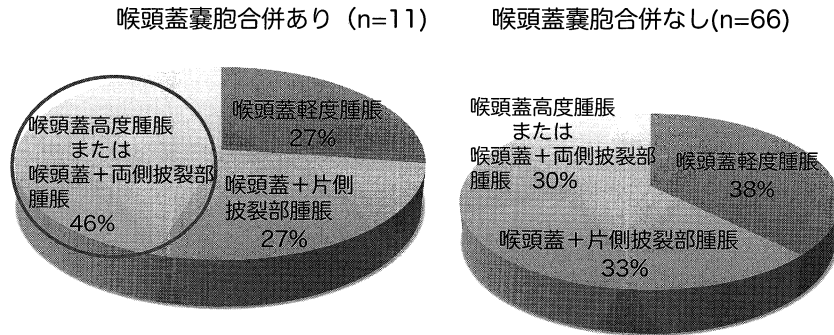
入院時の呼吸困難の有無と気道確保の有無については, 喉頭蓋嚢胞を合併した群では, 呼吸困難を自覚する割合, 気道確保を要する割合ともに高い傾向にあった (Fig. 6)。

入院期間については, 喉頭蓋嚢胞を合併した群で  $8.5 \pm 3.7$  日, 合併の無い群で  $9.1 \pm 5.6$  日と両群間に差はみられなかった。

5. 考 察

急性喉頭蓋炎と喉頭蓋嚢胞の関連については, これまでもいくつかの報告がある<sup>1)-5)</sup>。喉頭蓋嚢胞を合併した急性喉頭蓋炎の割合については, 本邦からの報告<sup>1)-4)</sup>では, 4.3%~14%とされており, また Yoon ら<sup>5)</sup>は 25%としている。2004 年以降 5 年間の 113 例を対象とした村田らの報告<sup>4)</sup>および 1997 年以降 12 年間の 117 例を対象とした Yoon らの報告<sup>5)</sup>では合併の割合が 10%を超えていたが, これは電子内視鏡をふくめた喉頭

## 入院時の喉頭ファイバー所見



喉頭蓋嚢胞を合併する例では、重症度の高い症例の割合が多い。

Fig. 5 Flexible laryngoscopic findings of a patient with acute epiglottitis at the time of admission

	呼吸困難		気道確保	
	あり	なし	施行	施行せず
■ 喉頭蓋嚢胞合併あり (n=11)	3例 (27.2%)	8例	6例 (54.5%)	5例
■ 喉頭蓋嚢胞合併なし (n=66)	10例 (15.1%)	56例	20例 (30.3%)	46例

Fig. 6 Prevalence of dyspnea and Airway management of patient with acute epiglottitis at the time of admission

ファイバースコープの性能の向上により、より小さな嚢胞病変を検出できるようになった影響が考えられる。2004年から約6年間の77例を対象とした我々の結果も、喉頭蓋嚢胞の合併例は14.3%と村田らの報告とほぼ同率であったが、診断には電子内視鏡を使用した例がほとんどであった。

喉頭蓋嚢胞を合併した急性喉頭蓋炎について、Yoonら<sup>5)</sup>は以下のような特徴を示している。1) 喉頭蓋嚢胞を合併した急性喉頭蓋炎では、非合併例と比較し、(1)入院期間が延長、(2)気道確保を要する例が増加、(3)急性喉頭蓋炎の再発率が増加。2) ロジスティック解析により、気道確保に関連する因子は(1)呼吸困難の有無と(2)感染した喉頭蓋

嚢胞の合併の有無。3) なお感染した喉頭蓋嚢胞と喉頭蓋膿瘍の鑑別は困難な場合もある。

今回の我々の検討では、急性喉頭蓋炎のうち喉頭蓋嚢胞を合併した群と合併の無い群との間で、入院期間には差がなかった。しかし入院時、喉頭蓋嚢胞を合併した群の方が白血球数についてはやや高値であった。また入院時の喉頭ファイバー所見では、喉頭蓋高度腫脹または喉頭蓋+両側披裂部腫脹をきたした重症度の高い症例の割合は、喉頭蓋嚢胞を合併した群で高かった。呼吸困難の自覚及び気道確保を要する例は、Yoonらの報告と同様に喉頭蓋嚢胞を合併した群に多い結果であった。急性喉頭蓋炎の治療においては、気道確保のタイミングに苦慮する事も少なくないが、喉頭蓋嚢胞を合併する急性喉頭蓋炎では、気道確保の時期をふくめ、臨床経過につき、より注意を要するものと考えられた。なお、今回の症例の中には急性喉頭蓋炎の再発例はなく、両群間での比較はできなかった。

### ま と め

喉頭蓋嚢胞を合併した急性喉頭蓋炎の特徴を明らかにするため、臨床的分析を行なった。その結

果、喉頭蓋嚢胞を合併した急性喉頭蓋炎では、嚢胞の合併の無い例と比較し呼吸困難を自覚する割合が高く、内視鏡所見上も重症度の高い症例の割合が高く、気道確保を要する割合も高かった。この結果から、喉頭蓋嚢胞を合併する急性喉頭蓋炎では、臨床経過につき、より一層の注意を要すると考えられた。

#### 参 考 文 献

- 1) 高木秀朗, 堀口利之: 急性喉頭蓋炎の疫学. ENTONI 40: 1-6, 2004.
- 2) 宇和伸浩, 八田千広, 辻恒治郎, 他: 急性喉頭蓋炎症例の検討. 耳鼻臨床 96: 811-817, 2003.
- 3) 飯田実, 石井正則, 部坂弘彦, 他: 急性喉頭蓋炎 170 例の臨床的検討. 耳鼻咽喉科展望 42: 374-379, 1999.
- 4) 村田考啓・室井 昌彦・古屋 信彦: 急性喉頭蓋炎の臨床統計: 気管切開に関連する因子 耳鼻臨床 103: 9; 833 ~ 838, 2010
- 5) Yoon TM, Choi JO, Lim SC, Lee JK. The incidence of epiglottic cysts in a cohort of adults with acute epiglottitis. Clin Otolaryngol. 2010; 35: 18-24.

連絡先: 原 浩貴  
〒 755-8505  
山口県宇部市南小串 1-1-1  
山口大学大学院医学系研究科 耳鼻咽喉科学分野  
TEL 0836-22-2281